

演題②

カツオ一本釣り漁の歴史と民俗

東北大学災害科学国際研究所 川島 秀一

三陸沿岸におけるカツオ一本釣り漁の始まりは、延宝3年(1675)に、鮪立(現宮城県気仙沼市唐桑町)の鈴木勘右エ門が、紀州のカツオ一本釣り漁の漁師たちを抱え込み、「つりため」(カツオ一本釣り漁法)という技術の導入をはかったことからであった(『陸前唐桑の史料』、日本常民文化研究所、1955)。

それまでの三陸におけるカツオ漁は、「近海」で「鰹待居漁」(石巻市狐崎、平塚家文書)と記録されているように、カツオが沿岸に寄ってくるのを待って釣る、消極的な漁法であった。それに比べると、紀州の漁師は、カツオのエサイワシ(活きイワシ)をボウケ網で捕り、それを船に積み込んで漁場に向かうという、積極的な漁法であった。

三陸の海域まで「他国出漁」をした紀州の漁師とは、紀伊半島の東岸の漁師であり、唐桑の鈴木家文書には、「三輪崎」(現和歌山県新宮市)という地名も読める。この地方では藩政時代に、「三輪崎会合」という7カ村の漁師が結集し、取り決めを作ってカツオ漁を操業しており、そのうち三輪崎と太地は古式捕鯨も盛んなところであった。現に、牡鹿半島へ出漁した紀州の漁師は、カツオやイワシだけでなく、クジラの捕獲も大きな目的であった(平塚家文書)。

また、カツオ自体が「山を目指して来る」(静岡県西伊豆町田子の伝承)と言われ、紀伊半島や西伊豆・三陸沿岸など、山海至近の地形であるリアス式海岸にカツオ漁の基地が発達した理由も、黒潮に沿ったカツオ自体の行動に一因するものである。カツオが金華山を目指して北上する様子を漁師たちは「カツオの金華山参り」と捉えたが、そのカツオを追って、西日本の人々が動いたのが「他国出漁」ということができる。

その鮪立の鈴木家文書には、「鰹獵前代春夏釣申義此方之獵師不存所ニ此紀伊之國之者共遠海之めぬけ取申所迄乗出シ釣参候…」とあり、唐桑の漁師は、カツオ一本釣り漁法が導入される以前は、春から夏にかけてカツオを釣ることはなかったが、紀州の漁師は、三陸地方で冬にメヌケを延縄漁で捕るようなところの遠海で釣っていると記されている。つまり、三陸沿岸では、春や夏ではなく、秋に釣っていたことになるが、それには理由があった。

唐桑町小鯖の漁師、小山亀蔵(明治33年生まれ)による現代のカツオ漁の記録には、「秋になると嵐のかける(荒模様の)日が多くなりますが、「かずなむら」(鰹魚群)は岸近くを通るようになるため、御崎の鼻を出ると漁場であり、毎日多忙となるのでした」(小山亀蔵『和船の海』、1973)とあり、秋のカツオは岸近くを通るために、三陸の「鰹待居漁」が可能であったのである。

また、秋のカツオのことを「デキヨ(出来魚)」とも呼ばれ、それは「秋になると水面の温度が下がるため、かつおは水面に浮かばず、底(海面下)を通るようになり」、「海面に餌をみつけると次第に浮びあがるようになること」をいう(小山亀蔵『和船の海』)。機械船が主流となった

昭和時代に入っても、秋のカツオは海面近くを群れることがなくなるため、群れに海鳥が集まることを目印とする「鳥付き」で漁ができなくなるといわれる。以前は、そのために、三重・高知・宮崎のカツオ船は、10月いっぱい、三陸海域での漁を切り上げて帰郷したという。現在は360度見られる魚群探知機であるソナーの普及のために、漁期が一カ月ほど延びている。

以上の事例のように、近世文書などの歴史資料をよりよく理解するためには、現在において書き遺されている手記や聞き書きなどの民俗資料からの援用が必要である。

たとえば、近世でも現在でも、カツオ一本釣り船に乗り組むときに前金をもらうことが多いが、その金のことを近世文書のなかには「身ノ賃」という語彙が記されている（岩手県大船渡市三陸町砂子浜、千田家文書）。一方で、気仙沼地方のかつての正月行事として、子どもたちが、船主のところへ行って「みのちん！」と言って小銭をもらいあるく行事があった。これも明らかに「身ノ賃」が年中行事に残されていたわけであり、正月に乗組員に見立てた子どもたちが金を要求してくることは、その年の乗組員の確保を約束させてくれる目でたい風習でもあったのである。

その後、明治末期の漁船の動力化は、宮城県の漁獲高を大きく躍進させた。大正元年（1912）に日本全国で27～28位の漁獲高であった宮城県は、同11年（1922）には第8位まで上昇する。そのころから気仙沼港にも「廻来船」が入港し始める。茨城県の漁船が明治38年（1905）、三重県尾鷲市のカツオ船が初めて入港したのが大正5（1916）～6年のころであった。その一方で、機械船の導入により、三陸沿岸の浜ごとにあった和船によるカツオ漁は、とくに資産家のいない浜で、機械船を購入する資金不足のために、カツオ船の経営自体を廃業していった。

また、漁業生産に必要な資金資材の一部または大部分を魚問屋が生産者に前貸し、そのかわり漁獲物はすべて前貸しをした問屋が安く買い取る「問屋仕込制度」は、「仕込型」経営をしていた浜々のフナモト（船元）を統廃合していった。

さらに、カツオ漁の「裏作」として、夏季に用いた同じカツオ船で操業されていた冬季の延縄漁は、メヌケからマグロへ移り、戦後の遠洋漁業に対する国からの奨励策を背景に、マグロ専用船として大型化していった。大型化する以前から、マグロ延縄漁の方がカツオ漁の半数の乗組員で済み、さらに安定した水揚量も得られ、当たりはずれの大きかった夏季のカツオ一本釣り漁を補填していたのが、冬季のマグロ延縄漁であった。現在では、三陸海域でカツオを釣る一本釣り船は、ほとんどが三重・高知・宮崎などの県外船であり、これらの船の入港に支えられて、気仙沼港は生鮮カツオの水揚げ量日本一の座を19年も記録し続けている。

現在、カツオ一本釣り船は、巻き網との競合などが問題化されつつあるが、世界中のカツオ漁のなかで、一本釣りという漁法を選択しているのは、日本を中心として約1割であり、ほかは皆、巻き網漁法である。現在はそのために、カツオの国際的な資源問題として浮上しつつあるが、一本釣りという漁法を守ることが資源を守ることに繋がるという言葉説が必ずしも世界に通じているわけではない。太平洋で最北端のカツオ漁の漁場である三陸海域での、カツオ一本釣りの歴史と民俗を明らかにすることは、漁業を「文化」として、世界へ向けて発信する手立てに成り得ると思われる。